

Title	宇尾野久著 西洋中世初期社会経済史研究
Sub Title	
Author	寺尾, 誠
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.5 (1961. 5) ,p.432(86)- 434(88)
JaLC DOI	10.14991/001.19610501-0087
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610501-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

J・ウィダランク

『第一帝政の末期におけるノルマンディの農業』

第一帝政期には対外戦争が続いた。徴発が繰返され、経済は疲弊した。革命で農民が獲得した利益は無残にも蹂躪されてしまったのである。混乱した経済の状態が続き、第一帝政はそれが原因で崩壊してしまった。経済によって政治はどれほど影響されることか。この論文でウィダランク氏はそのことを教えようとしたのであった。経済に対する不手際から帝政は評判を落し、急速に没落することになったのである。

ノルマンディの諸地方は戦争による損害を大して受けなかった。しかしそれでも経済の順調な発展は妨害された。否それどころではない。発展のあらゆる可能性を奪われてしまった。ノルマンディ地方もまた非常な混乱に陥っていたのである。その実態はどうか。ウ

ィダランク氏はこの論文で直接にはそのことに関説している。

農業では休作地が重要な意味を持つような体制が固執された。この段階で穀物を自給しようと思えば、肥料の欠乏による土質改良の困難から作付規模を拡大する以外にない。かくて休作地を積極的に利用しようという方向は阻止されてしまったわけである。じゃが芋の栽培は一時の流行に終わった。甜菜の収穫もた然り。後退の一途を辿った。休作地での飼料の栽培は中止された。旧態依然たる穀物生産への傾斜が続いたのである。

牧畜はどうか。牛については何の変化も起らなかった。牧羊業はどうか。この時期にメリノ種が移入された。戦時にもかかわらず牧羊では顕著な前進がみられた。ただし馬の受けた損害は大であった。無理な徴発の結果である。農耕に必要な馬すら完全な不足を告げた。従って十分な耕作は不可能である。他から購入して徴発に応ずる者もあり、不平は高まった。

以上が骨子である。ウィダランク氏によれば、そうした現実に対する不満は帝政の基礎をゆさぶるほどのものであった。

〔追記〕この論文は先年度の仏書講読の時間に読んだ論文の一つである。何かと多端で、十分な時間を割振ることができなかった。従って満足な理解が得られなかったかと思う。補足になれば幸いである。

J. Vidalenc. L'agriculture dans les départements normands à la fin du Premier Empire. Ann. Normandie, VII, 1957, 1; p. 179 à 201.

一 渡辺 國廣

宇尾野 久著

『西洋中世初期社会経済史研究』

本書は「ヨーロッパ中世社会経済史論攷」に続く著者の多年の研鑽の成果である。本書はドイツにおけるゲルマン社会から封建社会への移行の過程を国家を中心とする全社会構造的展開として把握することを目的としている。そしてこのために古代ゲルマン社会を「自由で平等なロマンチックな社会」或は「世帯共同体の原理」の貫ぬく社会としてとらえることを否定すると共に、「家父長的な

Haus herrschaftを史的頂点とする古典的世界」の展開という封建社会成立過程の把握の仕方に対して、家父長的支配体制の外に既に国家的関係が存在し、封建化の過程においてはこの国家の特別の役割を重視しなくてはならないとするのである。このような問題意識から著者は特に日本古代史の研究者故清水三男氏の大化の改新に関する研究を紹介し、清水氏が西洋社会経済史における古典理論への批判的問題意識から日本の大化改新を分析し、それが古代奴隸社会から封建社会への過渡期における国家による封建社会の方向への構造改革であった点を把握したことの再評価を提唱しつつ、フランク王国の構造的な分析を展開する。

そしてフランク社会では古典的な *Herrschaft* が新しい社会構成体に展開していく過程で軍事に媒介されつつ公的関係と私的関係の区別と公的権力の王権への移行がおこなわれたのであり、そこにおいては国家化と共に封建化の傾向が深化していったことにおいて国家化と封建化が対立するビザンツ社会との決定的差異がある。さらに国家は教会の防衛者としてあらわれ、ゲルマンの帝制は

ローマ的というよりキリスト教的な性格を帯びた。そしてこのような国家化と対応して進む封建化の過程を分析するためには、私領主や伯、聖俗両界の領主のワザルと共に王の自由人に注目すべきであり、この自由人からコロヌスが生まれ、これが *Zinsleihen* の保有者として、*Beneficium* の保持者と *Precedia* の受領者と共に封建化の基礎の一つであったといえよう。

さて以上のような前提の上で第一編ではフランク社会の政治的等族の形成の分析が行われる。その第一部ではフランク王国の国家機関が分析対象とされ、第一章では上級王国官職である伯職制の形成、第二章では下級王国役人のミニステリアレスが取り扱われる。

本書の特徴は第二部の王領民の個所にあらわれているといえよう。さてメロヴィング及びカロリング時代のフランク王国の官職として一方に伯、他方に一部は王の自由民から転化したと思われるミニステリアレスという政治等族が形成されてきた訳であるが、これと並んで王権にもとづく王の自由人が形成される。第三章ではまずカロリング時代の王の自由人 *liberi homines*

がどのような歴史的系譜をもつかについて分析し、これがメロヴィング時代の等族としてのレウデス(王の従士)から発生した新しい等族であることを明らかにし、第四章においてケンテナヤケンテナの長としてのケンテナリウスを構成するこの王の自由人が、王の商人との対比において裁判集団としての機能をもつことを、豊富な学説紹介と共に明らかにしている。

さらに第五章においてはこのようなように成立してきた王の自由人がカロリング時代を経るうちにどのような変化を蒙るかが分析される。即ち一方で王の自由人の一部上級者が軍事及び官吏の機能を果すワザルス、ミニステリアレスに転化すると同時に、他方で王への軍事奉仕は義務とされるものの、次第にその必要性が失われて行く他の部分は国王又は聖界、俗界の君主の賃子貢納人に転化するのである。

かくして所謂古典学説がゲフォルグシャフトーアンドウルスチオーネスワザルというドイツの封建知行ビラミッドの歴史像に対し、著者はドイツ学界における新研究が封建知行ビラミッドのもう一方の側面として王の

自由人が両極分解して行くということ、従って王の自由人は、王の自由人であると共に王の質子貢納人であるという二面的性格をもつという主張の正しさを確認する。しかしこのことは決して古典学説のゲフォルグシャフト↓ワザリテートの要因がフランク社会に存在することを否定することではなく、まさに封建知行のこの側面によって、フランク国家は後期封建国家から区別されるのである。

そして、ここにドイツ帝国及び王権から発する知行と諸侯の知行の並行的な二元的な知行構造の社会的基盤があり、フランス知行制と決定的に異なる理由があるのである。

さて第六章では以上のようなフランク王国の史的展開の過程で、王の自由人の転化した王の質子貢納人が、ドイツ中世の農民層に合流して行くことが実証され、第七章ではこの質子貢納人の転化した上級農民に対し、等族にいれられぬ最下層の非自由農民が考察される。

そして第二編「フランク時代の王領地」では王権の物的土台としての王領地の問題が分析される。第一章「資財帳簿例」では管区により構成される王領地の軍事的、経済的構造

を分析し、第二章ではクアレティエン帝国質子帳をめぐる諸問題、最後に第三章ではロルシュ帝国質子帳を中心として王領地とそれをめぐる複雑な人間関係、歴史的條件を分析している。

かくして本書は中世初期のドイツの封建社会成立史を特に国家との関係においてとらえ、フランク社会の構造的な分析を、豊富な史料及び学説紹介によりつつ行わんとした点において、この問題に関心のある人々にとって極めて貴重な研究書である。但し初学者にとっては予備的な学習と共に本書を読む必要がある。(泉文堂・A5・二九四頁・七〇〇円)

—寺尾 誠—

WJ・J・スベングラール編

『経済思想論文集』

(Essays in Economic Thought: Aris-totle to Marshall, edited by Joseph J. Spengler and William R. Allen, 1960) 貴重な研究は必ずしも単行本のかたちをと

らないで、しばしば学術雑誌に発表されたままとなつていたので、よほど丹念に調べていないと見逃すことが多い。この書は、一九三〇年代から今日に至るまでの間に、The Southern Economic Journal, The American Economic Review, The Quarterly Journal of Economics, The Journal of Political Economy, The South African Journal of Economics, The Economic Journal, The Canadian Journal of Economics and Political Science, Economica, The Review of Economic Studies などに発表された経済思想に関する重要な論文三一篇を集めたもので、巻末にくわしい索引が付き、極めて便利なものである。スコラ哲学、重商主義、古典学派、マルクス、歴史学派、制度学派、限界学派、新古典学派など六部門に分れ、それぞれに、「この諸論文に扱われた主題を経済学史の発展の中に位置づけ、またこれらの論文とは違つて扱われたり、または全く扱われなかつたような関連した題材を示すために」(Preface)序論が添えられている。 編者は古代ギリシヤからマインシャルに至る

るので、ビブリオグラフィはついていない。

* * *

—白井 厚—

花井益一著

『価値と貨幣』

本書は花井氏が一九五三年から五九年にかけて、富大紀要経済学部論集、経済評論などに発表された価値論関係の諸論文を収録したものである。

戦後のわが国におけるマルクス価値論の研究は数多くの論争を経て、厩大な文献を累積するにいたつた。しかしこれらの論争が、どれほどマルクス経済学の発展に貢献したかという点については疑問を感じないではない。価値論に関する論争は、論争のための論争という観を呈し、なんらの解決もあたえていないように思われる。この原因が価値論の研究が、価値論そのものの解釈に終始し、より具体的な理論との関連を失つたことにあると考えることは不当ではないであろう。

いいかえるならば、価値論は経済を分析するためのアパレイタスであることを認識していなかつた点にあるのではないだろうか。

本書に収録された諸論文も、わが国における価値論研究のこのような面をはっきりとみせている。著者は序で、本書の論文はどれも「精密な思考を瀟過して書いた」ものであり、また「カッコつきのニセ・オリジナリチ」ではなく「真のオリジナリチ」をうちだそうとしたと書かれている。しかしこの「真のオリジナリチ」はあくまでも解釈の「オリジナリチ」であつて、価値論研究に新しい方向をあたえるような「オリジナリチ」ではない。むしろ本書の意義は価値論の日本の性格を認識させ、価値論研究への反省を促すことにあるかもしれない。収録論文が戦後の論争の多くの問題にわたつていゝこともこれをたすけるであろう。なお本書に収録されている論文はつぎのとおりである。

- 第一部 (一)「生産力表現としての使用価値 — 使用価値Ⅱ生産力表現・価値Ⅱ生産関係表現 —」一九五三 (二)「複雑労働の還元をめぐる諸問題」一九五四 (三)「価値法則の現象的解釈 — 山本二三九氏の主張にたいする反論 —」一九五五 (四)「価値法則と市場価値」一九五八 (五)「国際価値法則」一九五九
- 第二部 (一)「商品の貨幣への転化 — 方法論

経済学の発展を示そうとつとめたが、これだけの大きな範囲にわたると、収録する論文の選択はかなり問題となる。「選ばれた論文と編者の序論は、重要な著作家か、または西洋経済学の発展に従つてその思考方法を反映する有意義で綜括的な思想を扱っている。このようにして、思想と著者だけでなく、時代と諸学派もここに示されている。」(Preface)とあるように、主として研究の対象をもとに編集されたようである。従つて研究の水準としては必ずしも妥当でない場合もあるけれども、先ず代表的な論文集で、主な執筆者はJ・J・スベングラール、B・W・デムシイ、W・D・グランブ、R・ルーヴァ、M・アーキン、A・I・ブルムフィールド、B・F・ホゼリツ、E・カウダー、H・M・ロバートソン、W・L・テイラー、J・ヴァイカー、T・W・ハチソン、G・J・ステイグラール、J・M・カッセル、R・L・ミーク、H・グロスマン、P・T・ホウマン、A・J・ニコル、F・H・ナイト、M・フリードマン、C・G・ユニア、G・F・シャヴ、N・カルドアなどである。アメリカ経済学協会から一八八〇年以後の経済学定期刊行物文献目録が出